

発行日 2010.12.18

編集発行人 重富克彦

時は縮まっている。

1Cor7:21

Kairos

事務所所在地 064-0912 札幌市中央区南12条西12丁目2-27 011-561-9516

インマヌエル

すべての存在と共に

「見よ、おとめが身ごもって男の子を産む。その名はインマヌエルと呼ばれる。」この名は、「神は我々と共におられる」という意味である。マタイ1章23節

旧約の詩人は、彼が神さまと共にいる事実から、一瞬たりとも離れることが出来ない深い感覚を次のように詩う。

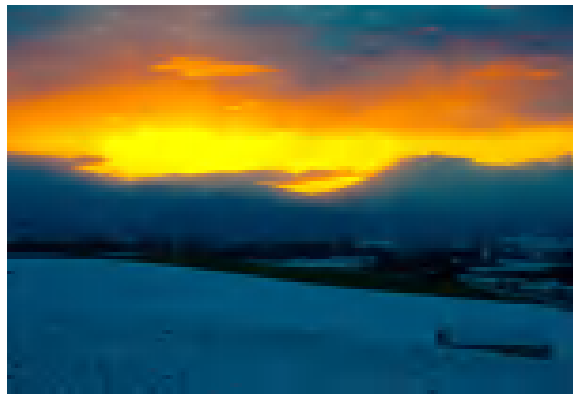
「どこに行けば、あなたの霊から離れることができよう。どこに逃れば、御顔を避けることができよう。天に登ろうともあなたはそこにいまし、陰府に身を横たえようとも、見よ、あなたはそこにいます。曙の翼を駆って海のかなたに行き着こうとも、あなたはそこにいまし、御手をもってわたしを導き、右の御手をもってわたしをとらえてくださる。」(詩篇139:7-10)

「神さまが共におられる」ということは、何も殊更のことではなく、自分の存在そのものが、その事実なしには一瞬たりともあり得ないことなのだ、詩人はしみじみ感じている。それだけではなく、森羅万象、神さまが共におられないところはないことも、詩人はその深い感覚でとらえている。

森羅万象の背後に神を感じ取ることで、日本人も古来から優れた感覚を持っていたと思う。西行法師の「なにごとのおわしますかは知らねども、かたじけなさに涙こぼる」と詠んだ歌は、まさに、森羅万象の背後に人間を超え

たお方がおられるという感覚を表明しているものだ。それは聖書において、被造物の多様な現象の背後に創造主の息遣いを感じ取る感覚とも共通するものだろう。

しかし、大きく違うのは、共におられ



る神さまは、人に対してはどこまでも人格的な関係でいて下さるということである。このお方と心を静かに向い合わせると、無限の慈しみの広がりの中に深く大きく包まれている自分があり、それなしには一瞬も存在し得ない自分があることを知らされる。

その慈しみの、広さ、深さ、低さ、高さが、どれほど無限であるかを啓示して下さったのが、乙女マリアから生まれられたイエス・キリストの生涯だった。

マタイは、イエスの誕生をイザヤ書のインマヌエル預言の実現として紹介している。インマヌエルとは、ヘブル語の「共にいる」を意味する「インマヌ」と「神」を意味する「エル」の組合わさった言葉である。

「どこに行けば、あなたの霊から離れることができよう。どこに逃れば、御顔を避けることができよう。天に登ろうともあなたはそこにいまし、陰府に身を横たえようとも、見よ、あなたはそこにいます。」といわれるときの「あなた」は、今やイエス・キリストとして物言われた神である。そのお方が陰府にまで降ってくださった。

インマヌエル。神さまが共にいて下さる。信仰とは、その隠された神秘に気づかせていただくことであり、信仰の喜びとは、自分の人生の歩みの中に備えられているその神秘を、発見する喜びでもある。それはわたしたちのただ中であって、しかも、私たちの歩みのすべてを包んでくれている。

クリスマス。ここから始まるイエス・キリストの生涯のすべてが、インマヌエルの啓示である。(重富)

教会の活動

上田幸子(ゆきこ)姉

祝受洗

12月19日、札幌礼拝堂のクリスマス記念礼拝の中で、上田幸子姉が洗礼を受けられる。これから主にある兄弟姉妹として、共に歩む出会いが与えられたことを、心を新たにしたい。

昨年の9月から札幌礼拝堂に出席。一年あまりの求道の後、洗礼を受けることを決心された。

彼女は幼い頃、おばあちゃんに連れられて、山鼻カトリック教会に通っていたということである。その記憶は彼女の原体験として生き続け、時至って聖霊の促しにより、再び神を求めようという気持となって現れた。

ではなぜ、このルーテル教会だったのだろうか。ここにも不思議な神の計らいが見られる。彼女が、再び教会の門を叩こうという思いを起させられるに当たっては、一人の友人M氏の存在がそこにあったのだ。

この友人M氏は、札幌から2000km以上も離れた鹿児島県の阿久根市にあるルーテル教会の会員だ。阿久

根市に居住しながら、全国を回る仕事で、札幌にもしばしば来ていた。神は二人を、彼女が経営するススキノの店の常連さんとして出合わせられた。店というのは la musque 上田 というシャンソンクラブだ。彼女はその店のオーナーというだけでなく、自分もシャンソンを中心に500曲を超えるレパートリーを持つ歌手である。

常識的には、お酒を楽しむ席での宗教や政治の話は御法度のことが多い。これは日本だけの話ではない。けれども、M氏と上田姉の場合は、二人の人柄のせいか、違和感なく神さまの話ができるような雰囲気だったのだらうと想像している。そういえば、イエスが神の国を説かれるときも、屢々そこにぶどう酒があったではないか。

このようなわけで、彼女はM氏の勧めもあって、ルーテル教会を選んだ。この場所に風格のある教会があることは、以前から知っていたらしい。

神さまの粋な計らいと言えば、いささか不遜な言い方になるかも知れな

いが、このような奇しき計らいを思うにつれ、神さまは救いの手を、あらゆることを通して、伸しておられることを、あらためて思う。彼女の愛の歌も、信仰を与えられて、ますます味わい深いものになるのではないかと想像している。 。受洗心よりおめでとう。



イエスもヨハネから洗礼を受けられた

2月6日2011年度教会総会

転換の年

2011年の教会総会は、2月6日(日)午後2時より札幌礼拝堂において開催予定。2011年度は、重富牧師が3月で引退、後任に宮崎教会より日笠山牧師を迎え、変化の大きな年となる。また代議員も、規則により総交替となるなど、大きな転換点の年ともなる。会員心を合わせて、この機会を、いっそうの発展の契機とすることが大切だ。牧師交替、代議員交替が、後継世代育成に資することになれば、たしかに発展の契機となるに違いない。

めばえ幼稚園

ページェント

11月にはいと共に、毎日のように練習を積重ねてきた、クリスマスページェントも、12月12日の家族クリスマス、15日の母と子のクリスマスで、元氣一杯に神さまにおささげし、お父さんやお母さんに見てもらい、無事終了した。年長のすみれ組が中心だ

が、いちご組も、ちゅうりっぷ組もクリスマスの聖書の箇所をちゃんと暗記して、大きな声で唱和した。

お父さんやお母さんも、心にキュンと来るものがあつたに違いない。神さまも、子どもたちのページェントを通しての礼拝を、何よりも、喜んでくださったはず。それは、巷のどんなイルミネーションよりも輝いていた。輝きに満ちたクリスマス。その光が、すべて

の人の心に届きますように。子どもたちの素直な心のように、苦しみを知る大人たちの心も、素直な喜びに満たされますように。



わたしの死

主は羊飼い、わたしには何も欠けることがない。

詩編23:1

このシリーズを閉じるに当り、自分の死に対する心構えや、見解を簡単にまとめてみよう。

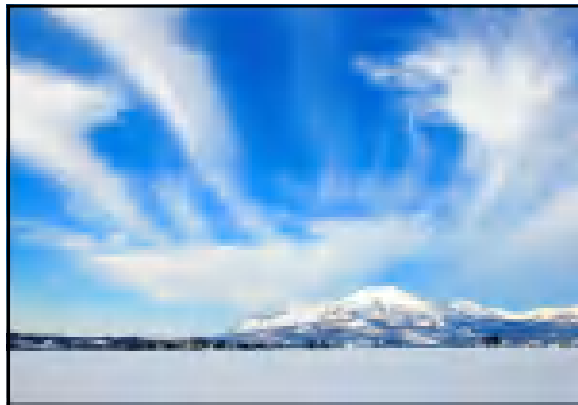
どのような死を願うかについては、ピンピンコロリよりも、出来ることなら、意識レベルが低下する前、一週間ぐらいの余裕はいただきたい。周りの人に感謝を述べ、神さまに心から懺悔する時間が欲しいのだ。

もし、死ぬまでの時間に、苦痛が伴うのなら、それは最大限取り去ってもらいたい。でも、ただ単純にモルヒネを投与してもらえばいいというものではないようだ。わたしの妻は、モルヒネの量が増えるにつれ、頭が朦朧としてしまうようになり、それがとても辛いと言っていた。苦痛を麻痺させる分、正常な意識も無理に朦朧とさせてゆくのだ。そのため投与を一時中断してみたが、やはり痛みがひどくて再開した。苦痛の軽減を可能な限り自然に出来るかどうかは、麻酔科医の腕によって、かなりの違いがあると聞いている。山本七平氏が、痛みを苦しんでいたとき、コンチン投与と、硬膜外ブロックが適切にできる麻酔医に出会って、痛みがすっかり取れたことを雑誌に書いていた。どんな名麻酔医がいるか、あらかじめ研究しておくのも大切かも知れない。入院してしまってからでは、選択肢は大幅に制限される。

しかし、最後の最後の時は、わたしも、いわゆる臨死体験をするだろうと思っている。臨死体験というのは、あくまで、近似死の体験であって、死ではない。この臨死体験は、宗教的なレベルよりも、科学的なレベルで解明されるほうが適切だろう。この臨死体験の殆どが、今まで経験したことのないような快感を伴うものであることも、まずは科学的に説明できるだ

う。今わたしが一番納得している説明は、断末魔は苦痛の極みなので、その苦痛を緩和するために、本能的に脳内快感物質が一挙に放出されるという説明だ。首を絞められて窒息しそうなときに気持がよくなったり、マラソン選手が苦しそうに走りながらも、快感を感じていたりすることが現実にあることから類推できる。本当に苦しいときには脳内快感物質が一挙に放出されて苦しみを和らげられること、それこそが神さまの慈しみによる摂理に違いない。

ただ、日頃どのような集合無意識を蓄えているかで、その快感と共に見る夢も違ってくる。三途の川と花園を



見る者もいれば、天使の群れを見る者もいる。いずれにしても、それはまだ此岸の出来事である。

息絶え、心臓が止り、完全に蘇生不可能となってからが、死後の世界である。イエス・キリストの他は、誰一人そこからは帰ってきた者はいない。

では、人は死後どうなるのだろうか。それについて人間の語るすべてのことは、「講釈師、見てきたような嘘をつき」の類を出ない。大新聞に度々広告を出している「霊界云々」もその類のものである。

聖書も、死後の世界については多くを語っていない。けれども、イエス・キリストがお語りになっているいくつ

かの暗示的な言葉から、想像を巡らし、希望を持つことは許されるだろう。特に復活についての問答の中で「次の世に入って死者の中から復活するにふさわしいとされた人々は、めとることも嫁ぐこともない。この人たちは、もはや死ぬことがない。天使に等しいものであり、復活にあずかる者として神の子だからである」(ルカ20:35-36)という言葉は示唆的だ。

息絶え心臓が止ったその瞬間から次の世が始る。まず霊の体に蘇って審判を受ける。そこで罪深かった自分の全生涯をあらためて見せられるだろう。慚愧に堪えず涙するに違いない。けれどそれによって、自分に注がれてきた神の愛にますます明瞭に気づかされることになる。神の愛を信じ、受け入れる者は、その愛の深さ、大きさを魂のすべてで知らされ、その愛の力により、神の国に復活する。愛を信じない者は死者の霊として陰府にとどまる。神の愛が命そのものだからだ。

わたしも霊の体が与えられ、復活し、神の愛と一体になると信じている。この世の肉縁は、親子、夫婦、親戚、すべて解消される。けれども寂しくはないのだ。この世で命を養った愛は、その愛しさも、慕わしさも、歓喜も、すべて浄化され、霊的な愛に高められる。

妻との再会は、わたしが今最も心待ちにしていることでもある。妻の魂とわたしの魂とが再会するとき、どんなに歓喜に満ちた一瞬が訪れるだろうか。けれど、決定的に生前と違うのは、そこに所有意識もなければ、執着もないということだ。純粹に愛があるだけ。それで、少しも寂しくはないのだと思う。天使に等しい者として、神の子とされているのだから。(重富)

<クリスマス期の聖と俗>

12月24日から1月6日まではクリスマス期であり、ロシア正教会では「聖なる日々(スヴァトキ)」というが、ブルガリアでは反対に「不浄な日々(ボガニ・ドニ)」とよぶ。一般に、ヨーロッパでは「境界に位置する」空間と時間は、危険視される。例えば、敷居を挟んで握手をしたり、窓越しに物を渡したりする行為が不吉とされるのは、敷居や窓が空間的に自世界と他世界(異界)との境界であり、その境界にまたがるのが不安を呼び起こすからである。クリスマス期は、太陽が冬から夏へ軌道を変え、

時間が闇から光へと移動し、古い年が終わり新しい年が始まり、救世主が誕生して混沌が神の宇宙秩

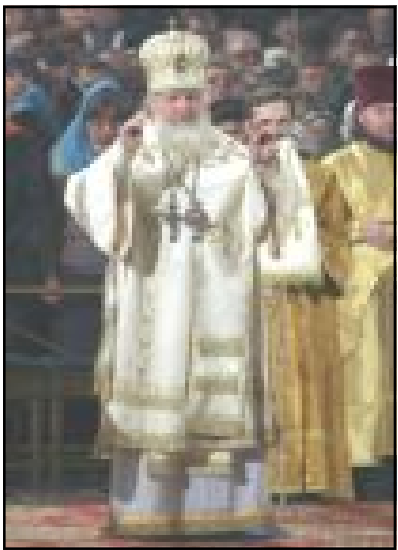
序へと転換する時間的境界であり、肯定的に解釈されるが、同時にそれは異界の諸力に属する危険な期間である、と考えられた。北ロシアの民間信仰によれば、大晦日の夜に無数の悪鬼どもが地獄から出てきて、キリスト教徒を威嚇しながら地上をわがもの顔に徘徊し、忌まわしい行為をほしのままにする。民衆の俗信では、神は御子の誕生を喜んで「あの世」から死者たちの霊と悪鬼たちのすべてを解放する。「シュリークン」という小さな河童に似た妖怪がクリスマス・イヴに煙突から真っ赤に焼けた鉄の手鉤を持って現れて、口から炎を吐きながら人々を捕まえようとして路上を走りまわる。シュリークンは母親に虐待されて死んだ幼子の霊であるという。

シュリークンは顕現日(正教会用語では「神現祭」)の晩禱が終わると姿を消す。南ロシアの俗信では、人狼、魔女、悪霊がクリスマス・イヴに人々に危害を加える。魔女が空を飛んで星を袖の中にかき集めて盗み、悪霊が月を隠すという伝承はゴゴリの短篇『降誕祭の前夜』のなかに描かれている。ベラルーシ人は、クリスマス期に衣装箱を十字架のしるしで封印する。さもないと、洗礼を受けずに死んだ子供の霊が衣類を盗む。類似の俗信は、バルカンの南スラヴ人のあいだにも広く知られ

どおし休むことなく飛びまわり、幼児を絞め殺し、母乳や牛乳を奪う。スロヴェニア人たちのあいだでは、クリスマス期の夜になると墓地で死者たちの行進が見られる、と信じられた。ブルガリア人の民間信仰によれば、クリスマス期には天が開け、大地が篩(ふるい)のように孔だらけになって、天と地と地下の三界を隔てていた境界がなくなるので、地は混沌の空間となり、悪霊や亡霊が現れるという。カラコンジョという鋭い歯と長い爪をもつ真っ黒な半人半馬の妖怪、ブガンツィという片

ヨーロッパの民衆文化とキリスト教の中の民間信仰

(15) 栗原 成郎



祝福するロシア正教の司祭

ている。セルビア人の俗信では、洗礼を受けずに死んだ子供の霊は必ず吸血鬼タイプの悪霊と化す。それは「ネクルシュテナツ(未洗礼児)」とよばれる妖怪で、民衆の想像によれば、子供の顔をもつ鳥で、1月1日から8日にかけて夜

目、片脚、長い顎鬚をたくわえ、青い服を着た妖魔、ドラクスという吸血鬼が跳梁し、人間に害をなす。これらのデーモンは、自殺や横死などの不幸な死に方

をした人の死霊であるという。人は先の見えない未来を前にした時間的境界に立つとき、呪術やト占(ぼくせん)に頼ってきた。その限り人は不安の闇の中から出られない。クリスマスの光はそのような闇を破り、境界領域のかなたを照らす。

【総括】300年にわたる凄惨を極めた迫害に耐えて地中海世界で成立したキリスト教は、その後アルプス山脈とカルパチア山脈を越えてヨーロッパへ広がって世界宗教となったが、その伝播の過程において各地の土着宗教を習合せざるを得なかった。ヨーロッパのキリスト教の中の民間信仰は異教基層の隆起現象であり、純粋なキリスト教信仰と峻別されるべきものである。

日本福音ルーテル札幌教会 牧師 重富克彦 岡田 薫
 札幌教会 URL <http://www.jelc.or.jp/sapporo>
 札幌礼拝堂 064-0912 中央区南12条西12丁目2-27 011-561-9516
 札幌北礼拝堂 001-0031 北区北31条西4丁目1-5 011-726-3243
 新札幌礼拝堂 004-0053 厚別区厚別中央3条6-1-5 011-891-5246

